

すべてを患者さんのために

福島孝徳先生インタビュー

聞き手

吉川左紀子（こころの未来研究センター長）

Sakiko YOSHIKAWA

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

Thoji KAMATA

阿部修士（こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門特定准教授）

Nobuhito ABE



福島孝徳（ふくしま・たかのり） カロライナ頭蓋底手術センター所長、デューク大学脳神経外科教授、森山記念病院附属福島孝徳脳神経センター最高顧問。1942年、東京都生まれ。1968年、東京大学医学部卒。東大病院脳神経外科助手、三井記念病院脳神経外科部長、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授、南カリフォルニア大学医療センター脳神経外科教授、ペンシルバニア医科大学アルゲニー総合病院脳神経外科教授などを歴任して現職。患者の身体的な負担とリスクをおさえる「鍵穴手術」を開発。脳神経外科顕微鏡手術の「全米トップの権威」と評され、手術や講義のために世界を駆け巡りながら、後進のため頭蓋底手術実習セミナーを開催している。著書『神の手の提言——日本医療に必要な改革』、『ラストホープ 福島孝徳』『福島孝徳 脳外科医 奇跡の指先』『神の手のミッション 福島孝徳』、コミック『神の手を持つ男』などの関連書が出版されている。



この日、福島先生が手術を担当される湖東記念病院前で。左から、阿部修士特定准教授、福島孝徳先生、吉川左紀子センター長、鎌田東二教授（撮影：坂井保夫、p2の写真も）

1 週間に8日働く

吉川 福島先生は、アメリカを拠点にして、日本をはじめ、世界各地を飛び回って手術をされていますね。

福島 いまアメリカが8か月、南米・ヨーロッパが1か月、日本が3か月という生活です。1年間に約600例のむずかしい脳神経外科の手術をしています。本拠地のアメリカで300例、それ以外の国で300例です。

今日は日本に来てちょうど1週間目ですが、ロスアンゼルスから東京に着いてすぐ大阪へ向かい、それから福岡、鹿児島、函館、釧路に行って東京に戻り、昨日がまた大阪、そして今日は滋賀です。

鎌田 先生のご本に「世界一忙しく働く医師」とありますが、まさに殺人的なスケジュールですね。何十年もそんなふうにお仕事をしていらっしゃるのですか。

福島 そうですね、30年以上同じ生活です。私の信念は、自分の天職に誇りと使命感を持って全力を尽くすということで、「すべてを患者さんのために」を座右の銘にしています。

患者さんの大切な健康を守るのに、休んでられないのです。いま日本だけでも私の手術を待っている人が約300人いますから、夜を日に継いでやっていた間に合わないのです。

私は人が休む土日、祝祭日ほど仕事をしています。年の暮れ、正月も休まない。休むのは罪悪だと考えていますから。休みの日は交通渋滞もないし、病院を回

って、どんどん仕事をして患者さんを助けることができます。ぶっ通しで働くので、「福島先生は1週間に8日働く」と言われています。

吉川 先生のそういうやり方は、お若いときからですか。

福島 そうですね。日曜日とか人が寝ている夜中に勉強して差をつけていました。

「鍵穴手術」の確立

吉川 福島先生は脳外科が専門でいらっしゃるのですが、とくにむずかしい手術ばかりされているのですか。

福島 脳外科の手術のレベルは1から10まであります。1～3はやさしいもの、4～6が普通のもの、7～10はむずかしいものです。7以上のレベルの手術ができるのは、日本全国の脳神経外科医8,000人の中で10人くらいじゃないでしょうか。私のやっているような複雑困難な脳腫瘍の手術ができる人は1人もいません。

吉川 手先の器用さという点では、日本人は優秀だと思いますが。

福島 日本は脳卒中の患者さんが多いので、脳卒中、脳血管系の手術は上手な人がけっこういます。おそらく、日本の脳外科医の脳血管手術の技術は世界のトップクラスだと思います。しかし、その人たちもせいぜいレベル5、6ぐらいまでで、レベル7～10のむずかしい巨大脳動脈瘤や頭蓋底腫瘍は、ほとんどの日本の脳外科医には手に負えないでしょう。

「漏斗型」



「逆さ漏斗型」(「鍵穴手術」)



「漏斗型」と「逆さ漏斗型」の「鍵穴手術」との違い
 (“Fukushima Manual of Skull Base Dissection”より)

吉川 アメリカには先生のような脳外科医はいらっしゃるのですか。

福島 アメリカでもあまりいないですね。だから、私が世界ナンバーワンです。まず技術が違う。私は臨床医になって1年目から先輩のだれよりも手術がうまかった。それは先天的なものですが、でも、才能というのは2%ぐらいで、90~95%は努力なのです。

それからコンセプトが違う。やっている手術数が違う。私は膨大な症例経験を持っています。

阿部 福島先生は、「鍵穴手術 (Keyhole Surgery)」と呼ばれる、顕微鏡を使った脳外科手術を確立されたのだそうですね。

福島 1970年代以前の脳外科手術は肉眼で行われていました。そのため、頭を大きく開き、表面の「術野」、すなわち手術操作を行う部位を広くして、そこから病巣がある脳の深部の狭い術野へ進んでいく、いわゆる「漏斗型」の手術法が行われていました。

70年代になってから、日本でも欧米でも顕微鏡手術の時代に入りました。開頭の大きさも少し小さくなり、10センチからうセンチへ改善しました。そして80年代に、私が鍵穴手術を開発したのです。これは頭蓋骨に直径1~2センチの小さな穴をあけ、顕微鏡で術野を10倍から20倍に拡大した映像を見ながら手術を行う方法です。これによって、開頭する部分を狭くすることができるようになり、それまで行われていた「漏斗型」の手術法とは逆なので、「逆さ漏斗型」の手術法と言われます。

私は三井記念病院の部長になった1980年頃からその手術法の改良に心血を注ぎ、試行錯誤の末、安全で確実な手術法として「鍵穴手術」を確立しました。1987年にスペインで開かれたヨーロッパの脳外科学会で、「鍵穴手術のすべて」という講義を行ったところ、この分野のパイオニアであったスイス・チューリッヒ大学のヤシャギル教授や京都大学医学部の菊池晴彦教授から「私の後を継ぐのは君だね」「君は世界で十分にやっつけていける」と言ってもらい、心の底からうれしく思い

ました。

ご存じのように、脳の中には血管や視覚・聴覚などの無数の神経線維が複雑に張り巡らされています。手術のときにそれらに器具が少し触れただけでも傷がついてしまう恐れがあり、それが術後の半身不随や顔面麻痺などの深刻な後遺症を引き起こす危険性も高いのです。

「鍵穴手術」は、どうすれば患者さんの負担を最小限に抑えて手術ができるかを追求した結果生まれたのですが、それによって脳神経外科の手術は大きく変わりました。小さな入口から器具を挿入して、神経線維などを慎重に扱いながら奥に潜む病巣に到達するには、繊細な配慮、ミクロン・レベルの高度なテクニック、脳の構造の深い知識が求められます。ですから、これまで以上に、医師の能力による差が出てくるのです。

「鍵穴手術」の「鍵穴」はなるべく小さいほうがいいのですが、そのためには、高い才能、現状に満足しないでたえず追求と努力を続けていく姿勢、膨大な手術経験、その経験から得た豊富な知識や情報、経験が培う勘、神の助けなどの要素が欠かせません。それらがそろったとき、はじめて鍵穴の大きさは狭まり、手術の成功率も高くなるのです。そんな手術を私は年間600件手がけています。

モットーは「一発全治」

吉川 そんなむずかしい手術をするために、世界中を駆け回っていらっしゃるのですか。

福島 私は良性脳腫瘍、頭蓋底腫瘍、巨大動脈瘤などのむずかしい手術しかやりません。私にしかできない手術がたくさんありますから。もちろん、リスクはゼロではありません。しかし、どんなに大変でも、私の手術のリスクはだいたい0.3%から0.5%と言っています。それだけの誇りと実績と、私がやらなければいけないという気概もっています。

私のモットーは「一発全治」、つまり一度の手術ですべてを治すことです。脳腫瘍にも約100種類あり、「一発全治」できるのはその7割ぐらいです。残りの3分の1は悪性だったり、腫瘍が大きく脳内に浸潤したり、脳底動脈に食い込んでいたりして、手術しても取り除けないものです。しかし、おおかた70%は手術によって助けられるわけですから、他の医師が匙を投げするような手術でも、私ならできると判断したら全力を傾けて手術を行います。

日本の先生は概して中途半端です。脳腫瘍でも、3分の1とか半分取ってやめてしまうことが多い。そのあと、薬と放射線治療をし、2回目、3回目の手術

をして、また放射線をかけて、メタメタになった状態で私のところへ来られる患者さんがいらっしゃいますが、そうすると放射線のダメージと癒着とで、完全には取れません。最初から私が手術していれば治っていたのに、と悲しくなることがよくあります。そこで、中途半端に手術したら、患者さんの命は中途半端で終わってしまう、と若い医師に教えています。

最先端手術機器の開発

鎌田 三井記念病院の部長になってから、たくさん手術を手がけられました。

福島 私は東大闘争で安田講堂が占拠された1968年に東大医学部を卒業しました。それから研修医になって5年間であらゆる脳外科手術を経験し、脳生理学の研究にも取り組みました。これで一通りのことはできるようになったという確信を得たので、恩師の佐野圭司教授に相談し、外国へ武者修行に行くことにしました。ドイツに2年、アメリカに3年行って、アメリカではメイヨー・クリニックの脳神経外科臨床・研究フェローとして全米各地を回りました。こうして、技術的に大きなスキルアップをして帰国したのですが、帰ってみると日本の大学にポジションがないのです。それで、佐野先生の薦めもあって、三井記念病院の部長になりました。

民間に出ても私は絶対に日本ではだれにも負けないぞと思っていました。東大病院にいたころの年間の手術数は120ほどでしたが、三井記念病院に移った最初の年が200、3年目が300で、ついに年間600にもなりました。おそらく、それだけでも日本一の症例数ですが、さらに、私は毎週金・土・日は必ずどこかの地方病院に行って手術をしていました。

鎌田 手術用の道具もいろいろ開発されてきたそうですね。

福島 私のやっているような高度な手術は、1回の手術で特殊な道具が少なくとも100~200本は必要です。私はこれまで数々の手術用の機器を開発し、たくさんの特許を取っています。最先端の脳外科手術室には、総額1億円くらいの高額医療機器がそろっているのですが、ほとんど全部、私が特許を持っているものです。

脳神経外科の手術は、手術用顕微鏡の進化があっちはじめて発展しました。この顕微鏡の進化にも、私は大きく関与してきました。三井記念病院に入ったこ



福島先生の手術で回復した患者さんたち

ろ、手術用顕微鏡はドイツのあるメーカーのものが一番だと言われていましたが、私は満足できない点がたくさんありました。そこで、ちょうど手術用顕微鏡の開発に着手しようとしていたオリンパスの開発技術者たちと組んで、いっしょに試行錯誤しながら、世界トップの満足できるものをつくってもらいました。

また、脳外科手術では吸引管が欠かせません。手術中に出る血液や脳脊髄液、洗浄した水を吸い取って術部をきれいに保つための器具です。これも医療機器メーカーとともに3年がかりで開発しました。手になじんで自由自在に吸引圧が調節できるようなデザインにし、世界ベストの吸引管を、口径で10サイズ、長さで5種類つくるなど、さまざまな工夫を凝らしました。

頭蓋骨を削る機械もあります。頭蓋底の神経や血管の周りを削るのですから、安定性のいい高速のパワードリルが必要です。高速電気ドリルは性能がいいが熱を持つという欠点がある。そこで、水冷式と空冷式を開発して特許を取った福島ドリルが、全世界で使われています。針、糸、コットン、アンチフォグマスク、通気性キャップに至るまで、挙げればきりがありませんが、来る日も来る日も、何かいいこと、何か新しいこと、何か世界を震撼させることができないかと考えています。

鎌田 先生が開発された機器は、世界中に何百台、何千台とあるのですか。

福島 何万のオーダーでしょうね。世界のトップ・ブランドですから。しかし、地方の病院などに行くと、私の開発した手術器具をきちんと備えているところは少ないので、いつも600種類の器具を収納したケースとともに移動しています。

いま脳外科医療にはコンピューター、ロボティクス、血管内手術とか、いろんなハイテク機器が入ってきて



福島先生の関連書の一部

いますが、あと50年は緻密な手作業というか、フィンガー・ワークが最高の結果を出すかなめでしょう。脳外科以外の外科や整形外科はハンド・アーム・ワークですが、脳外科は指先のミクロン単位の動きができないといけませんので、スーパー・マイクロ・サージェリーといいます。この分野ではあと50年は私と弟子たちの「福島国際グループ」が世界に君臨すると思うので、それだけの誇りを持って世界中を回っています。

渡米して高く評価される

鎌田 先生は、日本の医学教育、あるいは医療体制をどういうふうに見ていますか。

福島 日本の大学システムは明治、大正のころから変わっていません。厳然たるハイエラルキーです。いい仕事をしていても、まだまだ若いと言われる。私が37歳で三井記念病院の部長に推薦されたとき、病院長から「若過ぎます。40歳を超えなければ、三井のような一流病院の部長にはなれません」と言われました。それに対して、推薦してくださった佐野教授が、「間違いのない人ですから、1年使ってみてください」と言ってくれました。そこで部長になって、毎年手術の症例を倍々にして、三井の脳外科を全国一にしたのです。

吉川 先生のご本によると、三井記念病院で部長を10年務められたあと、そのまま病院に残らずにアメリカに行かれたとか。

福島 「そろそろ教授に」という話があったのですが、日本の大学の教授選考基準はとてもおかしいのです。まず、人脈、金脈、それから同窓会の意向などが重視されます。学術業績も、内容ではなくて論文の数とかね。最近は少しは良くなってきているようですけども。私は当時、外国で発表したものを含めて200本近くの学術論文を書いていたし、先ほど言いましたように、「鍵穴手術」を確立して世界的に注目され、病院での治療も実績をあげていました。それでも、いくつかの教授選考会で見事に拒否されてしまったのです。

そこでもう日本に失望して、教授として招聘したいという要請を受けていたカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に行くことに決めたのです。1990年、47歳のときです。

私は日本男児としての誇りと、自分のやっている脳外科の分野ではだれにも負けないぞ、全米制覇、世界制覇をするんだという気概でアメリカに渡りました。しかし、東大の超アウトサイダーといわれていたから、そんなじゃじゃ馬なやり方がアメリカで通用するだろうかと思っていました。ところが、やることなすこと全部当たって、複雑な脳腫瘍と頭蓋底の手術ではアメリカでだれにも負けない、という感触をもちました。

UCLAで頭蓋底外科部門を創設して活躍したあと、南カリフォルニア大学（USC）に招聘されました。今回は医療センターの脳神経外科教授です。ここにいるあいだに、頭蓋底外科では西海岸でナンバーワンとして知られるようになりました。

それからピッツバーグにあるペンシルベニア医科大学に招聘され、そのアルゲニー総合病院・脳神経外科教授になり、その次にいまのデューク大学に移って13年です。アメリカではとても高く評価され、大事にされています。やればやるほど認められるアメリカには非常に感謝しています。

日本は、やってもやっても認められないし報われない。へたをすると、自分のやったことを「オレがやった」と言えない国なんです。

鎌田 日本は、戦後、アメリカ的な、民主主義的な体制を取り入れたはずなのに、どこでどういうふうに関違ったのですかね。

福島 日本の大学病院には講座制と医局という封建的なシステムがあります。そのため、1人の主任教授がピラミッドの頂点に君臨し、医局を取り仕切っているのです。この教授の意見にはだれも逆らえません。「教授、こんなふうにしたいんですけど」などと言えない。

日本は約1億2000万人の人口で医学部・医科大学が80近くありますが、これは多過ぎます。人口約3億人のアメリカに医科大学は120しかない。人口比で言えば日本は50もあれば十分です。そして、やる気を起こすために、全国の国立、公立病院は民間経営にして、自分たちで経営させればいいのです。国鉄でも、JRになってからどのくらいよくなりましたか。

日本には約8,000人の脳外科医がいます。これは世界で一番多いのです。アメリカが約3,800人で、ドイツが約1,500人、イギリスは約200人、スウェーデンも約100人しかいません。日本はバランスが悪い民主主義で、医学部さえ卒業すれば、脳外科医になりたいと思ったらだれでもなれる。アメリカは駄目です。大学でとる

脳外科のレジデントの数は1人か2人と決まっているのです。フランス、ドイツ、イギリスなどのヨーロッパも、脳神経外科専門医は国のメディカル・アソシエーションできちんとマンパワーがコントロールされていて、各国、年間に1人か2人です。そんな歯止めがないのは日本だけの奇妙な現象です。

神様に助けてもらう

鎌田 先生は手術をされる時、明治神宮に向かってお祈りをされるそうですね。それは、ここをクリーンな状態に保つためですか。

福島 そうですね。やっぱりリスクがありますからね。私のいままでの経験から、リスクがどのくらいかはだいたい分かります。生きるか死ぬか五分五分という手術もあります。そういうときには、自分の持てる全力を尽くしますが、あとは奇跡を起こさないといけないので、神様に助けてもらいます。

また、年にだいたい600人手術する中で、2～3人は手術後に、たとえば手足が弱くなる、視力が下がる、聴力がなくなる、などの症状が出る可能性があります。今日のはむずかしいと思ったら、神様に祈るしかありません。そうすると、信じられないようなことも起こります。

鎌田 奇跡のようなこともありますか。

福島 あとで振り返って、どうしてこんなにうまくいったんだろうというケースはたくさんあります。もう感謝の日々です。つい1か月前も、イタリアから患者さんが来しました。右の目が見えなくなって、ちょっと頭がおかしくなってきた。脳の動脈瘤です。血流が悪くなっているので、特殊なバイパス手術をしました。とてもむずかしい手術で、あとで何か出るかなと思っていましたが、信じられないくらいうまくいきました。

鎌田 手術のときに白足袋をはかれるそうですが、それは精神的な効果を及ぼしているのでしょうか。

福島 もちろん、お能の舞台に上がるような、厳粛な気持ちでやらなければならないということもあります。それに、手術のときに白足袋をはくのは、脳外科の手術は一切汚れない、きれいな手術でなくてはいけませんからです。よその脳外科の手術を見たら、もうどろどろです。

それから、私は手術のとき両手両足を使うのです。顕微鏡を見ながら手を動かします。同時に、顕微鏡のズーム、フォーカシング、電気メス、ドリル、超音波、ナビゲーションと、足元にペダルが8つくらいあります。それを左右の足で操作しなければいけない。

鎌田 ドラマーみたいですね。

福島 そうです。実は私は学生時代にジャズに凝って



顕微鏡を覗きながら手術をする福島先生

ドラムを叩いていたので、それが役に立っているのかもしれない。靴をはいてはそんな細かい操作はできないので、白足袋をはくのです。白足袋が一番いい。ガラスも針も刺さらないし、自由に操作できるし、非常に神聖で、きれいで、ところが引き締まる。でも、白足袋をはいて手術するのは世界でも私だけでしょうね。

名医を育てる全世界プロジェクト

吉川 先生は若手医師の教育にも力を入れていらっしゃいますね。

福島 私1人がどう頑張っても、1年間にこなせる手術の数はせいぜい600件です。脳腫瘍の患者さんは全世界に何千人、何万人といるのですから、安心して任せられる名医を育てなければなりません。私のところには、私の手術を見たい、勉強したいという脳外科医が世界中からやってきます。彼らには滞在中の面倒もできる範囲でみています。どこの国でも、だれでも、勉強したいという医師はいつでも大歓迎です。

2001年には米国公益財団の「国際脳神経外科教育研究基金 (INERF)」を立ち上げました。これは名医を育てるための全世界プロジェクトです。学生、研修医、脳外科レジデント、専門医を含めて、高度な技術を実習し、患者さんのために死力を尽くす精神をもった脳外科医の育成を進めています。

この財団の予算は年間3000万円。私が開発した「福島式機器」のライセンス料やロイヤリティの全額と私財を1500万円出し、あとは私の考えに共鳴してくれる病院や個人などから寄付を受けています。

脳外科医の指導は非常に厳しくやっています。私みたいに厳しく教える人はいません。ほとんどの教授は、「私がやるのを見て覚えなさい。それができないようなら見込みがない」というやり方ですが、私はそうじゃない。「こうして、こういう角度で、こうやるんだよ。やっごらん」と手取り足取り、事細かにすべてのコツを伝授します。

鎌田 しっかりと、いいコーチングをしているわけですね。そこで弟子たちも、すぐれた術者に育っていく。

福島 これからの医療はよりいっそうの努力と臨床の勉強が必要です。それなのに、みんな努力が足りない。だから、「人の2倍働き、3倍努力しなさい」と言っています。普通の仕事をしていたら普通のお医者さんにしかなれません。トップの医者になりたいんだしたら、みんなが休んでいる土日に働きなさい。家族には許しを請いなさいと。

いまの日本のお医者さんは、大学の医学部を卒業し、国家試験を通過して研修医になり、可愛い看護師さんと結婚して、小さな家庭を築いて、そこそこいい人生が送ればそれでいいというような人が多いです。日本一、世界一になる、どんな患者さんでも治す、という前進改革の気概がありません。

私は脳外科を選んでとてもよかったと思っています。脳外科はワンマン・プレーなんです。私の指先ひとつで決まる。だからゴルフに似ています。同じ医学でも、たとえば、心臓外科、胸部外科、移植外科などはチーム・プレーが大事です。だからサッカーやバスケットに似ています。

鎌田 タイプがあるんですね。

福島 脳外科は手術をする主治医によって患者さんの運命が決まってしまう。だから、私はいつもゴルフにたとえて、「最低パーを取りなさい」と言っています。脳腫瘍を取って、ほんの少し何かが出るのは許容範囲でパー、脳腫瘍を取って何も出ないのがバーディで、いつもバーディか、その上のイーグルを目指しなさいと言います。実際の患者さんの治療で、ボギー、ダブルボギー、トリプルボギー、OBは許されません。

人間としての道徳教育が必要

阿部 日本の若い人たちにはいま何が必要でしょうか。

福島 まず人間としての道徳教育が必要です。日本本来の道徳と精神を幼稚園からきちんと教えることです。こころの学習をしなかったらろくなものにならない

い。

いまは公教育で神道を教えることはできませんが、神道は宗教というより日本国民のこころの拠り所であり、精神の鍛錬ですから、日本人のスピリットなのです。人間として、日本人として、やらなければいけないこと、やっていいこと、絶対にやってはいけないこと、つまり神の道、道徳が神道なのです。これをしっかり教育することが大切です。いつ神様に見られても恥ずかしくない振る舞いをするのです。私は神道の精神に則って、「神様、私は間違ったことをやっていますね。神様にお褒めをいただくような仕事をしたい」といつも思っています。

昔から日本人は、強きをくじき弱きを助けるというサムライ・スピリットがありました。いまの子どもたちはそういう教えを受けていないから、いじめなんかが起こる。

明治、大正のきちんとした家庭では、毎朝、「お父様、お母様、学校へ行ってまいります」と言って出かけました。いまは礼儀作法がなくなってない。言葉遣いができていない。漢字が書けない、読めない。情けないですね。

そして、若い人には日本人としての誇りと気概を持ってほしい。「気概」と言えるような強い意志を持った若者が、いまいないですね。他国のドラマとお笑いだらけのテレビでは日本沈没です。

子どもさんの通知表にみんな3をつけるとかうをつけるとか、運動会で順位をつけないとか、ゆとり教育とか、何を言っているのかと思います。韓国や中国なんか、国を挙げてものすごい英才教育と愛国教育をしています。

この人は物理、この人は医学、この人は心理学、この人はアート、この人はスポーツと、それぞれのお子さんの能力を見いだして、その方向で最大限に伸ばすように手助けするのが教師の役目です。

「こころ」というのは教育と学習によって育つものです。一部の私立の学校は「質実剛健」「勉学第一」という方針でやっていますが、それを除くと、日本の公立学校はみんな駄目です。人間が形成されていくのに一番大事な小学校、中学校、高校の教育がなくなっている。

鎌田 幼児教育からなっていないですね。

福島 親も駄目、先生も駄目、政府も駄目、文科省も駄目。いったいどうなっているのですか。アメリカでは幼稚園のときから毎朝星条旗を掲げて、「アメリカ、アメリカ」とやるのです。中国も韓国もそうです。

前に日教組の全国大会の記事を読んだことがあります。沖縄の先生が、自衛隊は憲法違反で、日の丸は軍国主義の象徴であるということを生徒にやっとなら

せました、なんていうことを誇らしげに発表している。愛国心なんかないんです。オリンピックで金メダルをとって、「なでしこジャパン」(サッカー日本女子代表)が世界チャンピオンになって、日の丸が揚がった。これで涙を流さなかったら日本人じゃないですよ。

運動会で順位をつけなくて、だれが頑張るのですか。そんなことを言っていたら、オリンピックでメダルもとれない。情けないですね。私は現在の日本の状況については大変に憂えています。

吉川 私は海外出張でJALとかANAの便に乗ると、他の外国の航空便よりもくつろいだ気持ちになります。乗務員のサービスというか人あたりがどこか違うんです。心をこめて人に接する日本の文化や伝統が、そういうところに残っているように思います。

日本の若い人たちに言いたいこと

福島 日本の若い人たちに言いたいのは、常に前進、常に努力ということ。阿部さんは神経科学の基礎研究者ですか。日本一、世界一のことを何かやってくださいよ。日本は叡知とマンパワーしかない。だから、戦争中は「月月火水木金金」、休まず働け。それぐらいの気概がなければ駄目だと言われました。

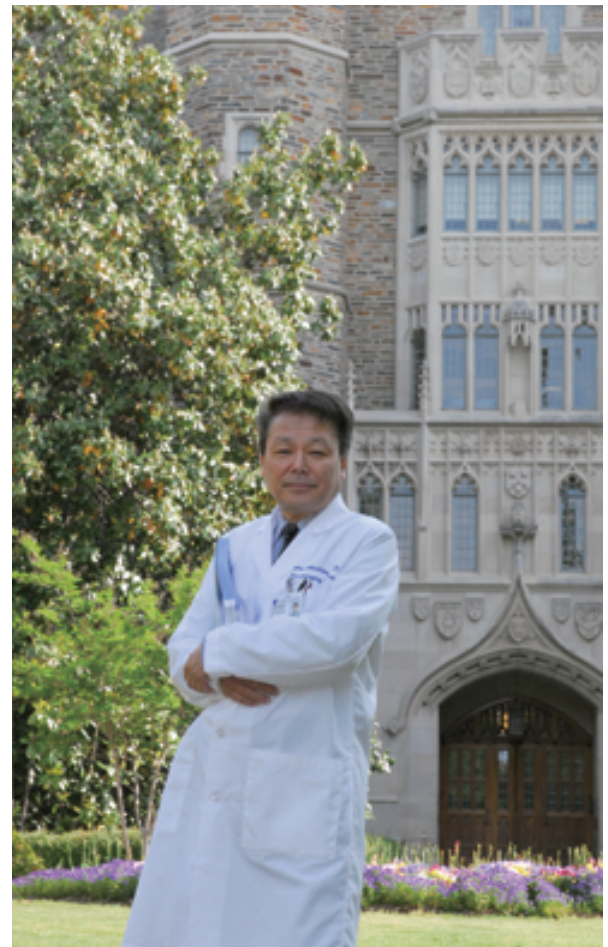
日本は欧米から「日本人は働き過ぎだから休め」と言われてそのとおりにしました。でも、週休2日制なんてとんでもない。かつて日本は土曜日は少なくともお昼まで仕事でした。私はそれに戻すべきだと思います。土日を休むと、何となくテレビを観たり、どこかへ行ったり、遊んで過ごして、人生を無駄にしているわけです。それで月曜日は休みボケであまり働かない。1年間に土日を休んだら104日です。日本はナショナル・ホリデーが世界一多い。国民の祝日が15日もある。なんでこんなにつくるのか、さっぱりわかりません。全部合わせると、約120日がオフィシャルに休みなんです。つまり1年のうち3分の1は働いていない。その上に、春休み、夏休み、冬休み、暮れ、正月でしょう？ おそらく日本人は1年間のうち半分は働いていないんじゃないですか。

東京や大阪の繁華街を歩くと、若い子たちが奇妙奇天烈な格好をして歩いている。何を考えているのかと思います。親はあれがいいと思っているのですかね。

吉川 若い人たちは、何かきっかけがあったら、がらっと変わりますよ。

福島 だから、教育が大事なんです。

鎌田 いま東日本大震災のボランティアに若者もけっこう行っています。阪神・淡路大震災のとき、「ボランティア元年」と言われました。こういう展開がいい形になるように、私たちがいろんな働きかけをしなければ



デューク大学キャンパスにて

ばいけないと思っています。

官僚国家を打破せよ

福島 それから日本の最大の欠点は、無数の規則と許認可制でがんじがらめのコントロールをする中央集権的官僚政治です。官僚構造と外郭団体を調べたらびっくりします。少し前まで、国家公務員が約100万人、地方公務員が約300万人いたのです。また、霞ヶ関の中央官庁の外郭団体は、17省庁で9,000あります。厚生労働省、外務省はとくに多い。厚生労働省だけで外郭団体が900あります。医薬品、医療機器の関係だけで50ぐらいある。そのうち、国民の税金が補助金で垂れ流しになっているところが半分くらいあるのです。いかに国民の税金が無駄遣いされて、高級官僚が天下りして国民の税金をむさぼっているか。この明治、大正以来の陋習、官僚統制システムを打破しなきゃいけない。霞ヶ関で公務員を少し減らしたというけれど、みんな外郭団体に流れています。

高級官僚は天下りと、国民の税金や補助金から自分の高給と退職金を得ることしか考えていない。中から下の官僚は、裏金づくり、カラ出張、あずけ空注文、居酒屋タクシー、年金ネコババ……。モラルがないん

です。

鎌田 日本はいつからそういう体制になったのでしょうか。

福島 明治のころから連綿と天下り先をつくってきた結果です。

鎌田 じゃ、明治維新の改革自体に問題があった。

福島 いや、問題は戦後の誤った社会主義的・左翼的教育です。明治維新から大正、昭和中期までは大和魂や侍魂と、人間としての道徳がありました。

鎌田 いまは国民意識・国家意識もあまりない。

福島 ありませんね。そして、税金の無駄づかいの一番は世界一多い公共事業費です。学校、体育館、道路、ダムなど、公共事業費はかつて60兆円あった。それが反省されて、いまは50兆円と言われていますけれども、そんなに必要ない。20兆円で十分です。先進諸国G7で全部合わせて20兆円ですから、その3倍近いお金を日本国内で土木建設会社にばらまいているわけです。

それから、日本は議員の数が多すぎます。人口に対して世界一議員が多いんです。衆議院は米国上院と同じ100人もいればそれでいい。議員というのはいったん数を増やすと、縄張りやテリトリーがあるから減らせなくなる。

私は道州制、地方分権大賛成なので、ドイツ方式です。ドイツは、各州が全面的な自治をしています。アメリカもそうですね。ワシントンが何と言おうが、最高裁が何と言おうが、各州の自治が認められているのです。

もうひとつ、日本が駄目なのは、国民が国家首班を選べないということ。自民党と民主党の勢力争いや派閥の中で決まっていくから、国民は選べない。

吉川 いまはヨーロッパもガタガタですね。

福島 ヨーロッパなんか破産ですよ。フランスもイタリアも破産です。いい国はドイツだけ。だいたいヨーロッパ人は働かせません。

日本は何も資源がないから、マンパワーで一生懸命働いて、知恵を凝らして、世界各国のどこよりもいいものをつくって、少し安く売るというやり方で、産業経済と輸出で成り立っている国です。ところが、いま韓国と中国にやられつつある。アメリカの家電量販店「ベスト・バイ」に行くと、みんなサムスンかLGです。車だって、これからは韓国製、中国製に取って代わられます。メイド・イン・ジャパンは、まだかろうじてデジカメや時計でセイコーとかカシオとかが頑張っていますけれども、テレビなんかまったく駄目です。全部韓国製品です。

父は明治神宮の宮司

鎌田 先生のお父様は明治神宮の宮司さんだったんですね。

福島 父の信義は、宮司の時代を含めて64年間、明治神宮に奉職しました。私は明治神宮のお膝下、原宿の外輪町で生まれ、原宿から代々木に移って、ずっと明治神宮で育っていますから、明治神宮は庭みたいなものです。ですから、明治神宮は私にとってこころのふるさと、こころの拠り所です。

鎌田 私も明治神宮で竜笛を習って、結婚式も明治神宮だったんです。

福島 明治神宮は1945年4月の大空襲で、本殿、拝殿、東西廻廊が焼失しました。米軍は空襲の際、病院、大学、博物館などは外したので、国立博物館、上野の東大、日赤病院などは全部空襲を免れた。それから、神社仏閣、浅草の浅草寺とか、ああいうのは免れているのですけれども、明治神宮は焼夷弾で全部焼かれたのです。

そして、戦後、マッカーサーは明治神宮を国民公園にしようと思いました。

私の父は、最初、東京外国語大学で哲学を専攻したあと、國學院の神道部で学んで神官になったので、当時、明治神宮の神官の中でただ1人英語に堪能だったのです。そこで、皇居前の第一生命ビルにGHQがあったのですが、そこに行って、「明治神宮を国民公園にすることはできない。明治神宮は日本人のこころの拠り所です。あなた方は日本の国を占領できても、日本人のこころまで占領することはできない」と言った。それで明治神宮が守られたという話があります。

吉川 そんなことがあったのですか。

鎌田 それは昭和21～22年ですか？

福島 いえ、終戦直後です。明治神宮は日本人の天皇崇拜、軍国主義の象徴と考えられました。

鎌田 国家神道の施設として潰そうとしたんですね。

福島 そうなんです。結局、明治神宮は残されることになり、父が新社殿造営を担当する部長に就任しました。全国から浄財を募り、宮大工さんや職人さんを集めて進められました。明治神宮の社殿は、寸分変わらず、戦前のおりに復興したんです。昭和33年に再建され、本殿遷座祭遷御の儀が執り行われました。だから、いまの明治神宮は50年以上経っています。

父に3回勘当された

福島 父は宗教家であり教育家であり哲学者でした。日本人として知っておくべき礼儀作法をまとめた『日本礼法』という本も書いています。いつも「胸を張り



明治神宮は福島先生の心の拠り所である(写真:明治神宮)

背筋を伸ばせ」「お金のことを言うな」「世のため人のために尽くしなさい」と言っていました。

父の実家は東葛飾郡に20万坪の広大な土地をもつ豪農でした。戦後の農地改革でほとんど取られました。それでも2万坪残っていました。父はそれを一切遺産相続しなかった。祖父は世のため人のために、息子の1人は医者にし、1人はお坊さんにし、1人は神職にする、ということで父が神主になりました。

父は明治神宮への奉仕が最優先で、家庭のためには何もしませんでした。それを支えたのが母でした。

吉川 お母さんはどんな方だったんですか。

福島 母は深川の富岡八幡宮の宮司の娘で、府立深川高女を出た才媛でした。私は母親っ子でしたから、いつも母のそばにいました。

鎌田 神主の息子として生まれて、そういう使命感をずっと持っていくのは大変ですね。

福島 私は中学のときは悪がきで、番長グループに入って喧嘩ばかりしていました。学校はおもしろくないし、先生はおかしなことを言うし、学校はあまり行かなかったですね。それで、福島家の息子としてふさわしくないということで父に3回勘当されました。

鎌田 ずいぶん異分子だったんですね。そういう生活から違う方向に変わったのはいつぐらいからですか。

福島 高校受験のときと大学受験のときです。高校受験のときに、「いい高校に入らないと大学に行かれないよ」と母に言われました。それで猛勉強して、元の四中の戸山高校という受験校に入ったからよかったです

けどね。母がいなかったら、私は医者になれていなかった。きっと新宿あたりでヨタっていたでしょうね。

吉川 アメリカでお仕事をされることに、お父さん、お母さんは何もおっしゃいませませんでしたか。

福島 むしろ母は、「狭い日本にいたらダメです。どんどん世界に出なさい」と言いました。

晩年の父もすごかった。清廉潔白で、お金のことは一切口にしない人でしたが、神社はそれまで国が管理していたのが宗教法人になったので、明治神宮も自分たちでやっていくために財政の基盤をつくらなければならなくなりました。そこで、もとの憲法記念館を結婚式場にして、明治記念館を拡充、神宮外苑に都内最大の30面のコートをもつテニスクラブをつくり、和食、洋食、中華、フレンチのレストランをつくり、引き出物の会社をつくりました。そういうビジネスを父がみんなやったのです。哲学者で教育家なのに、よくあれだけのことができたものです。そういう意味では偉い人だったなと思います。

吉川 最後に、先生は死についてどんなふうにお考えですか。

福島 私は父も母も亡くなっています。兄と弟がいましたが、どちらも亡くなってしまいました。ですから、私はいつ死んでもいいように、毎日一生懸命働いて、悔いのない生活を送るようにしています。私は過去のことはあまり悔やまないほうですね。

(2012年7月20日、湖東記念病院にて)